

ジャック・ゴドブー『竜の島』

——ケベック現代小説への誘い——

小 畑 精 和

『竜の島』(*L'Isle au Dragon*, Editions du Seuil, 1976) は、とにかく、おもしろい小説である。竜退治の伝説を現代に蘇らせ、科学技術の力に対して魔術的な力で、放射性廃棄物処理工場の建設を阻むという筋立てがおもしろくないはずはあるまい。

主人公のミシェル・ポーパルランは「緑の島」と呼ばれる島に生まれ育った青年である。この島にアメリカ資本による放射性廃棄物処理施設が建設されようとする。この計画はウィリアム・T・シャイーン・ジュニアが経営するペンシルヴェニア＝テキサス・インターナショナルによって進められている。パリにある竜の狩人の学校に神父の助言により留学していたミシェルは、竜退治の実習中に手に入れた黄金の針の魔力でシャイーン・Jr を呼び寄せ、この企業家を島の近くに住む竜の餌にってしまう。こうした顛末がミシェルによって書かれていき、各章ごとに様々な瓶に詰められて海に流されていく。

ゴドブーの小説の特色の一つは、社会的同時性の強い主題を、ユーモアを豊富に交えて描いていく点である。『やあ、ガラルノー』における青年のアイデンティティー喪失、『ダムール, P. Q.』におけるケベック独立問題等と同様、『竜の島』でも放射性廃棄物処理施設の建設という深刻な問題を様々な仕掛けを用いてゴドブーは軽妙に描いている。

まず、固有名詞の効果的な使用を挙げることができる。例えば、アメリカ文化の産物にケベックが毒されていることを、ケベック人の国民的飲料であるペプシコーラで象徴的に表している。ペプシが一番「気のすむまでゲップができる」飲み物であり、ペプシの社長は「ウォッカの国にペプシを紹介することによって、多くの外交官以上に、東西の緊張緩和に貢献した」と皮肉っている。また、マリリン・モンローも登場する。ミシッルはかつて映画に魅せられて、映画会社の運転手をしてしたが、その時シャイーン・Jr とモンローを乗せたことがあった。後部座席でシャイーン・Jr はモンローに対して破廉恥な行為をする。ここでもアメリカに対する憧れと失望が一つの固有名詞に凝縮されている。

次に、教会のパロディーである。ケベックは保守的な地方で、最近まで、「手すりごしの聖水撒布か大司教への電話なしにはいかなる重要な決定もできない」ほどの力をカトリック教会は実際に保っていた。そこで進路の選択に迷っていたミシッルは、カナダ職業指導協会の神父のところへ相談に行く。さまざまな質問やテストに応えた結果、彼に適した職業は竜の狩人であるという手紙を受け取る。こうしてミシッルはパリにある竜の狩人の学校に留学することになるのである。この挿話は、教会の力が現実的でなくなっていることをユーモラスに物語っている。

そして、竜伝説について述べておかねばなるまい。竜伝説は数多くあるが、キリスト教世界で最も有名なのは、聖ジョルジュの伝説であろう。聖ジョルジュは竜に苦しめられていたリディアの都市にやって来て、生贄にされそうになっていた姫を救う。竜を捕まえて町まで連れてきて、住民たちが洗礼を受けるという条件で、竜をそこで倒した。ここに説話論的な要素は出揃っている。試練、冒険、依頼者、姫、改宗である。余談になるが、ゲームソフトで「ドラゴンクエスト」がベストセラーになっていると聞く。竜伝説がかくも根強く現代社会にも生きていることの好例であろう。さて、話を戻して、『竜の島』では、これらの要素がパロディー化されている。社会に出ようとするミシッルの試練、竜の狩人として

のミシエルの冒険、彼を竜の狩人に適任であると判断した教会の依頼者としての役割、末尾でミシエルとネスカフェを飲む姫、シャイーン・Jrの異教徒的な役割が、この小説では滑稽に描かれている。ところで、竜の狩人の学校で最初に教わることは、「竜はわれわれの想像力の産物であり、存在しないのであり、存在しなかったものであり、これからも存在しないだろう」ということなのである。しかし、一方で、この学校の修了者が各地で活躍していることが語られ、「開発が遅れているというイメージを与えたくないために」人々が竜の出現を隠していること、聖ジャン湖では湖横断に挑戦する泳者に、竜による事故に遭遇した場合、裁判所に訴えたり、新聞社に通報したりしない誓約書に署名させることなどが報告されている。竜が実在するにせよ、想像上のものにせよ、ミシエルの頭の中ではその存在は疑う余地がないのである。ミシエルという名前は、大天使ミカエル（Saint Michel）を当然連想させる。この聖者の像は、悪の象徴としての竜と戦う姿が描かれるのが常だからである。さらに、ミシエルが竜の狩人に相応しいものだとして与えられるボーパルラン（Beuparlant）という名も意味深長である。ミシエルは「美しい語り手」でもあるわけだ。この小説は、ミシエルによる竜退治の物語なのではなく、彼が竜退治を語る物語なのである。

ところで、この小説に代表されるように、ケベック現代小説は、圧倒的なアメリカ文化によるケベック文化消滅の危機感に満ちている。しかし、問題は単に「ケベック文化の危機」にあるのではないようである。フーコーが『性の歴史』の中で指摘したように、問題は「抑圧されている」ということ自体よりも、「抑圧されている」という言説が広まっているということではなからうか。「ケベック文化の危機」や「ケベックの独立」を訴えること自体が、現代ケベック社会を維持しているメカニズムの一部として考えられるのではないか。1960年の自由党州政府成立以降、ケベックでは、独立問題が繰り返し持ち上がってくるが、連邦政府の中に踏み止まっている。1967年のドゴール訪問で勢いづいた分離独立運動はケベック党（PQ）に統一され（1968）大きな盛り上がりを見せるが、1970年の十月危機に際し過激派によるテロに対抗するため、ケベック州政府は連邦政府と手を結んでしまう。また、1980年に行われた、分離独立の可否を問う住民投票でも結局、40.48%賛成したに止まった。こうした状況で、「ケベック文化の危機」を唱える言説が権力のメカニズムといかなる関係を持っているのかを問うてみる必要が在る。

この観点から見ると、『竜の島』は単にケベック文化を擁護しているだけではなさそうである。末尾の部分で、シャイーン・Jrを竜の生贄にして、島に元の生活を取り戻したミシエルが家に帰って飲むとしているのはネスカフェなのである。このウロボロスの結末は、ペプシコーラやクラフト・フーズの製品に味覚が支配されていることにあれほどまで自覚的であった意識にまで浸透している権力の多形性の表現なのではあるまいか。

最後に、著者のジャック・ゴドブー（Jacques Godbout）について紹介しておこう。彼は1933年にモントリオールで生まれ、ケベックを代表する作家として、フランスとカナダ両国で作品を発表している。彼は詩人としてデビューし、フランスで『リベルテ』誌を創設した。『チップ・ボール』（*Carton-pâte*, Seghers, 1956）、『乾いた舗道』（*Les Pavés secs*, Beauchemin, Montréal, 1958）等を発表している。エチオピアの大学で、三年間、哲学とフランス語の教師として過ごし、その体験から、処女小説『アクアリウム』（*L'Aquarium*, Seuil）を1962年に刊行した。その後、『テーブルの上のナイフ』（*Le couteau sur la table*, Seuil, 1965）、『やあ、ガラルノー』（*Salut Galarneau!*, Seuil, 1967）、『ダムール、P. Q.』（*D'Amour, P.Q.*, Seuil-HMH, Paris-Montréal, 1972）、『パピノーの頭』（*Les Têtes à Papineau*, Seuil, 1981）といった小説を書いている。ゴドブーの小説は、一貫して一人称で書かれている。彼の小説では、話者の行為、すなわち、言葉によって現実をとらえる営みが小説自体の中で問題にされている。そうした点でヌーボー・ロマンに似ているとも言える。しかし、彼の小説は、ユーモアを絶えず背景にしつつ、現実の社会問題を積極的にとりあげ、そこに「参加」しようとしている。実際、ゴドブーはエコロジスト・グループを組織し、『竜の島』のミシエル・ボーパルランが放射性廃棄物処理施設の建設に反対したように、彼がわずかばかりの土地を所有する島が米国系企業によって超大型タンカーを基地に変えられ

ようとしていることに反対しているという。ゴドブーはまた、エッセイスト、劇作家、ジャーナリスト、映画家でもある。彼は『やあ、ガラルノー』でカナダ総督賞（1967）を受賞したのを始め多くの賞を獲得している。さらに、ゴドブーはケベック作家教会の設立者の一人であり、初代会長でもある。

第二次大戦後、ケベックは、ゴドブーの他にも、ユベール・アカン、ヴィクトル＝レヴィ・ボーリュエ、アンヌ・エペールなど優れた作家を多く生み出してきた。しかし残念なことに、ケベックの小説は現在のところまったくと言っていいほど日本では紹介されていない。この書評がケベック現代小説のおもしろみに触れる一助になれば幸いである。